



イーグレひめじにおける学生主体のPBL型の社会実験 の実施と心得 : 兵庫県立大学都市計画研究室の2024 年度の活動報告

北, 梨緒乃 ; 藤原, 颯太 ; 永井, 結季子 ; 山鳥, 実咲 ; 河原, 美羽 ; 太
田, 尚孝

(Citation)

兵庫地理, 70:137-146

(Issue Date)

2025

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100495950>



イーグレひめじにおける学生主体の PBL 型の社会実験の実施と心得

—兵庫県立大学都市計画研究室の 2024 年度の活動報告—

北 梨緒乃・藤原 颯太・永井 結季子・山鳥 実咲・河原 美羽・太田 尚孝

I. はじめに

1) 大学生の PBL の意義と課題

イーグレひめじ（以下、イーグレ）を対象とした兵庫県立大学環境人間学部都市計画研究室での Project Based Learning（以下、PBL）は、岡本ら（2021）の「しそはちみつコラボプロジェクト」に始まる。その後、河原ら（2024）によるイーグレプロジェクトからは、西松建設株式会社、イーグレひめじ管理会社、夕雲舎株式会社、姫路市都市計画課・産業振興課との協力体制の下、学部3年生による学生主体の PBL が行われている。

わが国では、2000 年から「総合的な学習の時間」が段階的に始まり、2013 年には「大学教育の質的な転換」の方策が展開された。その際、双方向の講義、演習、実験、実習や実技等の授業を中心とした課題解決型の能動的学習、いわゆる「アクティブ・ラーニング（Active Learning / 能動的・主体的学習）」が提示された。この流れの中で、PBL はアクティブ・ラーニングの学習法の 1 つとして、全国各地の教育現場で積極的に導入された。

PBL に関しては、岡野ら（2021）は、チームによるプロジェクト活動の活性化と評価を定量的に分析し、前年度の最終報告書のレビューと、報告会を複数回実施することにより、円滑なプロジェクト開始と作業時間の増加が見られることを明らかにした。豊田ら（2018）は、プロジェクトの評価方法について、学習者同士の相互評価が効果的であると指摘した。竹田（2017）は、プロジェクト実施後の効果分析を行い、PBL では、教育・研究・社会貢献との相乗効果があったことを示した。もっともこれらの論考は、教育者視点での評価、分析結果が主であり、参加側の大学生目線は乏しい。

そこで、本論では、2024 年度の活動を含むこれま

での学生主体の PBL を通して得られたことや気づき、課題感や具体的なプロジェクトの進め方について、学生目線で論じてみたい。

大学生が主体となる PBL は、学生自身の社会人基礎力の向上、関係者にとっても学生が関わることで新たな価値創造が得られる意義があろう。もっとも、課題は、大学生ゆえの自発性・継続性といえる。PBL が教育行為としてみなされればみなされるほど、実施の枠組みや責任問題が問われ、管理された中での PBL となる。そのため、場合によって学生には「やらされた感」を受けるリスクがある。また、仮に数年間プロジェクトを実施できる環境やフィールドが整っていたとしても、参加学生は毎年必ず入れ替わる。結果として、成果が見通せず、チャレンジすること自体が目的になる恐れもある。さらに、大学生の時間的制約は就活の前倒し等もあり、年々厳しくなっており、適切な活動時間が求められる。

これらの諸課題を念頭に置くと、学生主体の PBL の目指すべき一つの形として、社会実験という位置づけでスモールプロジェクトであっても具体的なアクションを学生が他者と協働しながら主体的に行うことが有効な方法と考えられる。

2) 本論の構成

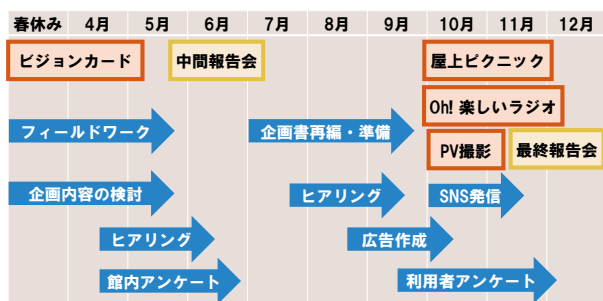
本論の構成は、4 章構成とする。I では、PBL が教育に取り入れられるようになった背景や、PBL における課題を明らかにし、学生主体の PBL では社会実験が有効である可能性を示した。II では、2024 年度に兵庫県立大学環境人間学部都市計画研究室の3年生が PBL として実施した社会実験「屋上ピクニック」に関する企画準備や現状分析を説明する。III では、「屋上ピクニック」の実施結果、評価、考察を述べる。IV では、学生主体の PBL を実施する際の留意点

や具体的な進め方を、過去のPBLの経験を踏まえて、大学生目線で同世代の大学生に向けて論じたい。

Ⅱ.「屋上ピクニック」の企画・準備

1) 課題分析と企画検討

2024年度のイーグレでの学生主体のプロジェクトは、2024年2月に夕雲舎と共同でイーグレひめじのビジョンカードづくりからはじまった(第1～第2図)。イーグレは、姫路城に近接する好立地にありながらも、施設の特徴がわかりにくく、必ずしも賑わいがある施設とは言えないまま関係者間で近年施設のあり方が模索されていた。この中で、イーグレでは「イーグレひめじビジョン“イーグレひめじの미래めざして”(2024→2026)」が示され、なにかのついでに気軽に立ち寄りたくなる、偶然の出会いと新たな発見があるイーグレを目指すことになった。その指針に基づき、イーグレを「ふらっと立ち寄りやすい」施設にしたいという思いから、イーグレを紹介するカードをつくり、同時に大まかなプロジェクトの方向性を決めた。



第1図 2024年度イーグレプロジェクトの流れ

出典：筆者ら作成

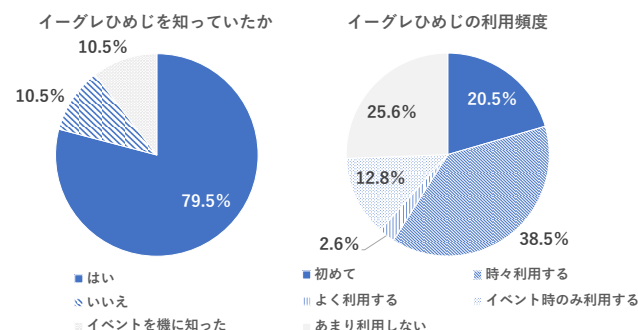


第2図 イーグレひめじビジョンカード

出典：学生作成

具体的なプロジェクトの企画立案のため、5月4日(土)に西松建設株式会社、西松地所株式会社、2階レンタルスペースのしろみエールへのヒアリング調査を実施した。同年5月5日(日)にはイーグレ館内イベント「こどもイーグレフェス」開催に合わせ、学生が独自で作成した来場者アンケート調査を実施した。アンケートの回答数は39、20代～40代が約7割を占め、男女比は4:6であった。

この中で、以前からイーグレを知っていたか?という質問には79.5%が「はい」と答えた。しかしながら、イーグレを「時々利用する」と答えたのは38.5%、「よく利用する」と答えたのはわずか2.6%であった(第3図)。なお、「時々利用する」「よく利用する」と答えた場合に、どの施設を利用するか?と聞いたところ、2階のフリースペースが10人(47.6%)、1階及び2階に立地する飲食店・カフェが8人(38.1%)と、1階、2階の利用者が多く、一方で3階のあいメッセホールが2人(9.5%)、4階の姫路市人権啓発センターが1人(4.8%)、屋上が4人(19%)であった。



第3図 館内アンケート結果

出典：筆者ら作成

この調査の結果から、現在のイーグレの課題は、①イベント時以外での利用頻度が少ないこと、②施設内で施設の利用度合いに偏りがあること、と分かった。この現状分析に加え、現地調査にてプロジェクト参加学生らが興味関心を持ち可能性を感じた屋上を今年度のフィールドとし、前述のイーグレビジョンも含め「屋上利用×日常利用」をコンセプトとして掲げた。さらに、企画案の具体化を進め、イーグレひめじ屋上の日常利用を目指すための企画とし

て「屋上ピクニック」「あおぞらフェス」を、学内でのイーグレの認知度向上とプロジェクト企画の宣伝として学内ラジオ「太田ゼミの Oh! 楽しいラジオ」を構想した。

これらを企画提案発表会という形で、6月18日（火）にイーグレひめじ管理会社、西松建設株式会社、西松地所株式会社、姫路市都市計画課、姫路市産業振興課、夕雲舎の前で報告した。

2) 実施に向けた準備

屋上空間にて来館者にピクニックを行ってもらう「屋上ピクニック」、屋上空間で大学生のサークル団体等に演奏会を開催してもらう「あおぞらフェス」は、実現化のためにはイーグレひめじ管理会社との協議が必要になった。イベント内容の企画書、屋上の配置図、屋上利用のルールを学生が作成し、管理会社への屋上利用申請を行った。「あおぞらフェス」は、出演者の募集が当然必要になり、地元の大学である兵庫県立大学内の部活・サークルへ参加の呼びかけを行った。しかし、イベント開催予定であった10月27日（日）は兵庫県立大学の学園祭のリハーサル日であったことなどから、「あおぞらフェス」開催は見送った。

「屋上ピクニック」を社会実験として行うには、今後の活用につながる十分なデータを得るための参加人数を確保することが求められた。そのため、イベント自体を広く知ってもらい、なおかつそのイベントに参加してみようと思わせる広報が必要であった。学生側ではオリジナルのピクニック宣伝チラシを作成した（第4図）。

表面には、ピクニックができる日時、イーグレへの行き方等の基本的なイベント情報を掲載した。裏面には、イーグレ館内・イーグレ周辺のテイクアウト可能飲食店のチラシ掲載許可をもらい、商品の写真と予算、学生のおすすめポイントとともに掲載した。また、できあがったチラシを掲載店舗に設置してもらい、店舗からイーグレ屋上への導線を可視化した。11月3日の「秋のイーグレフェス」開催時には、イーグレの屋上でピクニックができると伝える

ために、表面をポスターにして当日、1階の路面に出店しているキッチンカーにも貼ってもらった。さらに、兵庫県立大学環境人間学部の授業前の時間で学生へチラシを配布し、「屋上ピクニック」の告知を行った。





第4図 「屋上ピクニック」のチラシ

出典：学生作成

参加者のイメージとして、環境人間学部生を想定していたため、10月10日（木）、10月17日（木）、10月24日（木）の昼休みに、「屋上ピクニック」に関する校内放送「太田ゼミのOh! 楽しいラジオ」を行った。この校内放送は2023年度も実施しており、先輩の試みを引き継いだ。そのためプロジェクト自体の存在を知っている学生も多く、「今年はイーグレで何をしているの?」「イベントするなら行ってみたい!」との声をもらえた。

「屋上ピクニック」の宣伝と、その日のリアルタイム屋上状況の発信、天候状況の記録も兼ねて、開始前から社会実験中にかけて毎日、兵庫県立大学都市計画研究室イーグレプロジェクト Instagram を更新した（第5図）。屋上には、地上より風が強い、日差しが強いという特徴があり、その場に行かなければ様子が分からない。そこで、Instagram を活用し、学生が実際にピクニックをしている様子とともに投稿することで、屋上の様子を伝えることができた。

宣伝面はもちろん、天候・気象状況の記録が残るというメリットもあった。



第5図 Instagram 投稿内容の一例

出典：学生作成

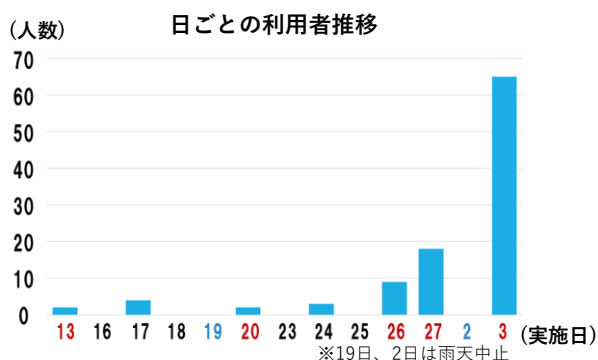
「屋上ピクニック」の開催準備を進め、イーグレひめじ管理会社との協議を進める中で、管理会社も環境整備に取り組んだ。屋上の曇っていたガラスフィルムを外し、地面の除草作業をし、設置されたベンチを塗り替えて、今まで進んでいなかった屋上空間の整備を進めた。姫路市も学生主体のプロジェクトでありながら、市のHPで周知をしてくれた。

Ⅲ. 「屋上ピクニック」の実施・評価

1) 実施概要

イーグレでの学生主体の社会実験「屋上ピクニック」は、10月13日（日）から11月3日（日）に、11時～15時の時間帯で実施した。企画自体は、イーグレ2階のしろみエールにて、4種類の中から参加者が自由に選べるレジャーシート、折りたたみ机、バスケットを無料で貸し出し、利用者に屋上でゆっくり過ごしてもらうという内容である。実施日数は期間中の月・火曜日を除いた13日間で、10月19日（土）、11月2日（土）は雨天のため中止であった。実施結果は利用者アンケート、貸し出し記録用紙をもとに集計した。

まず、11 日間で総計 103 名（30 組）に利用してもらえた（第 6 図）。日ごとの利用者の推移では、社会実験開始直後は利用者が一組だけであり、利用者がいない日もあった。企画の終盤では利用者は増加し、「秋のイーグレフェス」のイベントが重なった 11 月 3 日には 65 名（21 組）が「屋上ピクニック」に参加した。



第 6 図 日ごとの利用者推移

出典：筆者ら作成

もっとも、参加者は少ない日でも、いつもはプラスチックのチェーンで仕切られ屋上の半分が進入禁止であった場所が、「屋上ピクニック」開催時にはチェーンを外してもらえたため、広々とした屋上空間で元気に走る子供たちの姿がみえた（写真 1～3）。また、雑草もなくなり、ガラスも透き通り、ベンチも塗り替えられた屋上へ立ち寄った人は「屋上きれいになったね！」と私たちに笑顔を見せてくれた。10 月 26 日には団体利用者もあり、屋上にてハロウィンパーティを開催した。大人数で滞在できる場所を求めている時に、この企画を Instagram で知り、利用したいと思ったと参加動機を話してくれた。音楽を流し、学生がポップコーンを売るプチイベントを開催した 10 月 27 日と、11 月 3 日にはピクニックセットの貸し出しを屋上にて行った。結果的に、貸



写真 1～3 屋上利用の様子

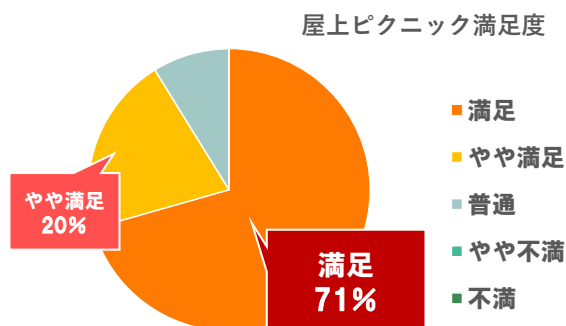
出典：学生撮影（10/13、10/26、11/3）

し出しセット利用の気軽さという点では、すべて広げて置ける屋上での貸し出しが効果的だと分かった。

2) 利用者アンケート調査の結果

アンケート結果に基づくと、「屋上ピクニック」で満足・やや満足と答えた割合は 9 割にのぼり、不満・やや不満と答えた人はいなかった。満足の理由としては景色が良かったこと、ゆったり過ごせたこと、貸し出しのおかげで荷物が少なくなったことが挙げられた。その一方で、日影が少ないこと、姫路城以

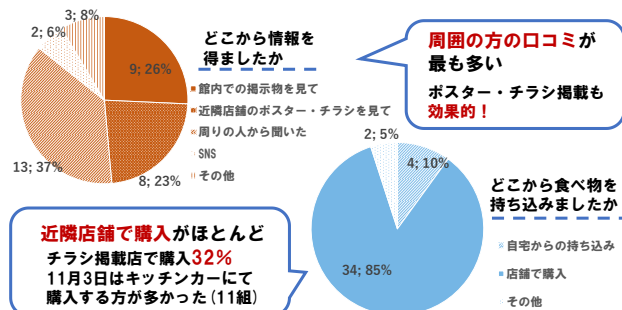
外何もないことが普通の原因としてあった(第7図)。



第7図 利用者の満足度の評価

出典：筆者ら作成

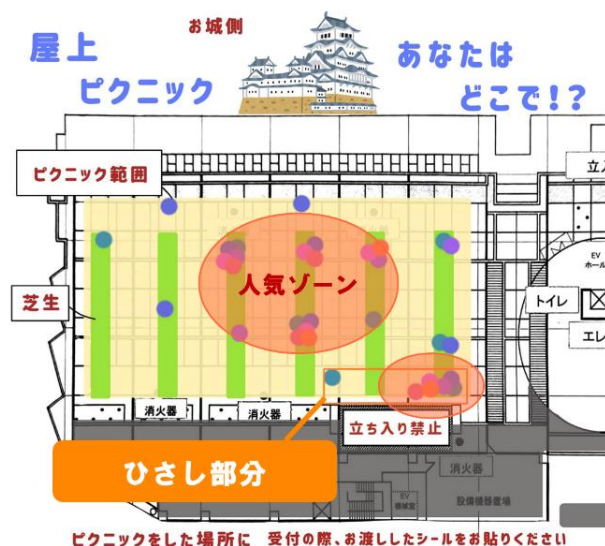
どこから情報を得て参加したのか？という問いには、一番多かったのが「周りの人から聞いた」であり、次いで館内での掲示物、近隣店舗のポスター・チラシであった。食べ物はどこから持ち込んだか？という問いには、近隣店舗での購入が回答の大部分を占めていた。なお、チラシ掲載店での購入割合は32%となっていたうえに、キッチンカーで購入した人は全体の3割であり、チラシで宣伝した効果を実感した(第8図)。



第8図 利用者の情報入手源と食品購入場所

出典：筆者ら作成

また、屋上のどの位置でピクニックする人が多いか調査するために、利用者に滞在した位置にシールを貼ってもらい可視化した。その結果、姫路城からは少し遠いが、日陰となるひさし部分と、姫路城が正面に見える位置の芝生部分で滞在している人が多いことが分かった(第9図)。なお、屋上のベンチにレジャーシートを敷いて滞在する人も見られた。



第9図 ピクニックを行った場所

出典：筆者ら作成

さらに、レジャーシートはどの形態が人気なのかを探るため4種類のレジャーシートを用意し、利用回数を調査した。用意したレジャーシートは4~6人用(もこもこ・わいわい)と2~3人用(キャンプ・オシャレ)で、結果はもこもこレジャーシートが11組と最も人気だった(第10図)。利用者に4人以上の家族連れが多かったため大きいサイズのレジャーシートの人気が高かったと考えられた。



第10図 レジャーシートの利用状況

出典：筆者ら作成

3) プロジェクトの成果報告

2024年度のプロジェクトの成果報告として、2024年12月5日(木)に、兵庫県立大学環境人間学部の学内プレゼン大会である環境人間学フォーラムにて口頭発表を行った(写真4)。現在のイーグレの課題、その課題を乗り越えるために行った今年度の企画と

結果について報告をした。また、12月20日（金）にはイーグレひめじ管理会社、西松建設株式会社、西松地所株式会社、姫路市都市計画課及び産業振興課、夕雲舎の前で最終成果報告会を実施した。この際に、環境人間学フォーラムでの発表内容に加えて、イーグレ活性化の今後の展望もイーグレ関係者全員で話し合うことができた。



写真4 環境人間学フォーラムでの口頭発表

出典：学生撮影（12/5）

4) プロジェクトを通じた学び～2024 年度学生リーダー北 梨緒乃～

このプロジェクトを通して、小さなことをコツコツと取り組むことがやがて大きな変化になっていくため、良かったところは継続し、改善すべきところは工夫を凝らしながら次につなげるということの大切さを学んだ。今回実施した屋上ピクニックも、最初は人が来なかった。しかし、チラシを配り、毎日SNSを更新することで少しずつ来てくれる方も増え、最終日には多くの方に来てもらうことができた。掲げていたコンセプトである「日常利用」にはまだたどり着けていないが、この社会実験は大きな変化をもたらす最初の一步になることができたのだと私は感じている。そして、この最初の一步を作り出すのは「チャレンジ」である。何事もやってみなければ始まらず、やってみてからこそ成功もしくは失敗して次につなげることができ、大きな良い変化を生み出すことができる。失敗することを考えるのではなく、失敗した後どうすればよくなるかを考えるという視点が大事なのだと学ぶことができた。

今後の展望としては、屋上利用の一步を踏み出すことができた現状を少しずつ発展させ、活用の幅を広げていくことが大事だと考える。「屋上ピクニック」に関しても様々な挑戦をしながら毎年同じ時期頃に開催して、屋上での「日常利用」を実現させていけたらと思う。

IV. 考察：学生主体のPBLの心得～類似のPBLを行う大学生の皆さんに向けて～

1) 「学生主体」とは何か

兵庫県立大学都市計画研究室によるイーグレでの学生主体のPBLは3か年が過ぎたが、あらためて最初に「学生主体」という意味について考えてみたい。まず、「学生主体＝学生だけで物事を進めること」と勘違いしてしまう場合があるが、それはおおよそ誤りであることをはじめに述べたい。

「学生主体」の本当の意味は、学生が主体となり、周囲を巻き込みながら物事を進めるということである。そのために、「明確なゴールの設定」「スケジュールの組み立て」「成果を最大化させるためのチームワーク」これら3つが、プロジェクトを進める上で根幹となる部分である。そこからさらに「関係者との信頼関係の構築」により、いかに自分たちのプロジェクトに関連付けることができるかどうか、成果の充実度を左右する大きなポイントとなる。

以下、この4つのテーマに分けて、学生主体のPBLの留意点を整理する。なお、実際には、私たちもここで書ききれない様々な紆余曲折があり、全てがスムーズに行えたわけではなかった。それでも、何か自分たちの経験を同時代の大学生の皆さんに伝え、より良いPBL実施のヒントになればと願っている。

2) 明確なゴールの設定

学生間のミーティングではじめに話し合っしてほしいことが、「いつまでに、何をしたいのか?」というプロジェクトのゴールに関することである。いきなり与えられたテーマに対してアイデアを考え出すのではなく、まずは思考の枠組みを自分たちで設定す

ることが、一貫したプロジェクトを進めることができる鍵となる。

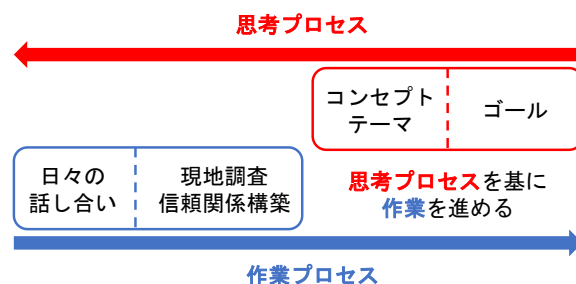
注意したい点としては、初動段階で検討する、いわゆるプロジェクトのコンセプトや核となる想いの部分を、その先もぶらさないことである。そのために、自分たちの方向性は誤っていないかどうか、先輩や指導教員を含め、一度打ち合わせを行うことが肝要である。可能であれば、この際に関係者も一緒になり、ゴールのすり合わせを行えることが理想である。学生主体のプロジェクトでは、実践することができるフィールドが存在することが大前提である。そのため、自分たち学生だけでなく、関係者を含めそのフィールドにもメリットをもたらす必要があるためである。

3) スケジュールの組み立て

続いて2)で設定したゴールから逆算し、「いつまでに、何をすべきなのか」、自分たちが「したいこと」を実現させるために必要な作業について考える。大きなゴールは2)で設定済みのため、次は大きなゴールに向けた小さなゴールをいくつか設定する（第11図）。「何週間後までに、この作業を、これらの目的を持って実行する。」というように、時期・作業内容・目的が具体的であればあるほど、着実にプロジェクトは前に進みやすい。また、事前に全体のスケジュールを組み立てておくことで、自分たちが考えていた通りにプロジェクトが進捗しているかどうか、確認することができる材料にもなる。遅れが生じている場合には、どのように作業を分担して遅れを取り戻さなければならないか、予定よりも早く進捗している場合には、質を高めるためにできることはないか、検討する必要があるためである。

仮にプロジェクトが行き詰まっている場合には、すぐに周囲を頼る姿勢を心がけてほしい。周囲とは、先輩や指導教員といった身近な存在や、フィールドに対して想いを持たれているプロジェクトの関係者である。チーム内で熟考することで前に進むのであれば熟考を続けるべきであるが、恐らくそのまま足踏みをしてしまうことが大半であろう。その足踏み

のフェーズをいち早く抜け出す方法は、外部から刺激を得て、ブラッシュアップを試みることである。学生が行うプロジェクトでは、分からないことがあるのは当然であり、そのことに対し周囲にアドバイスを求めることはプロジェクトを前に進めるための一番の近道である。常に自分たちの考えがあることは前提に、周囲に頼る姿勢を大切にしてほしい。



第11図 学生主体のPBLの進め方

出典：筆者ら作成

4) 成果を最大化させるためのチームワーク

1. リーダーの役割

プロジェクトの全体を俯瞰し、何が必要かを常に考えることがリーダーの一番の役割である。「いつ、何をすべきか」「そのために今、何をしなければならないか」リーダーが全体像を把握した上で、リーダーにしかできないこと・他のメンバーにもできることを分けて、作業をチームで分担できるように働きかけることがリーダーに求められるスキルである。

上記のようなプロジェクト全体のマネジメントさえできれば、リーダーの役目を果たすことはできるので、学生主体のPBLではリーダーの向き・不向きはあまりないと思う。リーダーになった学生への留意点としては、どのような経緯でプロジェクトのリーダーが決定するかは分からないが、「今までにリーダーをした経験がないから」「人に頼ることが苦手だから」という理由でリーダーの役割を拒否することだけは避けてほしい。あくまでもプロジェクトマネジメントの役割を果たすだけであり、プロジェクトを着実に前に進めることを常に意識し、行動に移すことが大切である。

2. メンバーの役割

プロジェクトの進捗をすべてリーダーに任せきりになると全く前に進まなくなるというのも、学生主体のPBLの性質である。1.に「(リーダーは)あくまでもプロジェクトマネジメントの役割を果たすだけ」と記したが、これが実際にはとても難しく、リーダーが考えることはとても多くなる。だからこそ、メンバーからの声掛けが必要不可欠となる。

「あれってどうなった?」「今は何をしなければいけない?」とメンバーからの刺激があることで、リーダーとしてしなければならない作業を思い出すことができるとともに、「私だけでは無く、チーム全体でプロジェクトに取り組んでいるんだ」という、リーダーの安心要素にも繋がる。

声をかけ合うことは、互いに抜け漏れを悲観しているわけでは無く、プロジェクトを進める上で必要なことを指摘しているだけなので、肩を落とす必要はない。むしろ、自分たちで抜け漏れに気付くことができ、軌道修正をして前に進むことが大切なので、日常からプロジェクトについての声掛けを、リーダーからもメンバーからも積極的に行うようにしてほしい。

5) 関係者との信頼関係の構築

2) から4) までに述べたことは基本的なポイントとして抑えつつ、学生主体のPBLで一番大切にしてほしいことは関係者との信頼関係の構築である。

信頼関係を構築するためにまず必要なことは、気持ちよく挨拶をして、顔と名前を関係者に覚えてもらうことである。「どこの、だれが、どんなことをしたいと考えているのか」を認識してもらえて初めて、信頼関係は構築される。はじめは顔と名前を覚えてもらえずに動揺することもあるかもしれないが、それに臆せず挨拶をし、コミュニケーションを重ねることで、プロジェクトに関わる情報を入手することができる。同時に、こちらの熱量を関係者に示すこともできる。プロジェクトに関わる情報共有をできる限り密に、スピーディに行うことも、信頼関係の構築につながる。コミュニケーションと情報共有を行うことで、関係者との信頼が構築され、プロジ

エクトの質の向上に繋がるヒントとなりうる、新たなつながりを生む可能性もある。学生主体のPBLでは、注意点が多く、モチベーションの維持が難しくなる時期もあるが、学生だからこそ、熱量だけは忘れずに取り組んでほしい。関係する全ての人が、私たち学生を応援して下さる環境であることを理解し、意欲的かつ楽しみながらプロジェクトに取り組むことが実際には一番の恩返しとなる。熱量が信頼を生み、信頼がつながりを生むことを念頭に、チーム一丸となってプロジェクトに取り組むことが、成功の秘訣であると考ええる。

謝辞・付記

プロジェクトの実施にあたり、本当に多くの方々にご協力をいただきました。ここに記して、あらためて心より感謝申し上げます。なお、本プロジェクトの派生的試みとして、姫路市の『魅せて! my himeji』動画コンテストに「Daily イーグレ:新しい風景」(兵庫県立大学環境人間学部都市計画研究室+土田昌平)と題した学生目線でのイーグレのプロモーション動画も作成、出展した。

参考文献

- 岡野仁庸・古本政博・大島草太・竹中秀樹・佐原宏典(2021):「プロジェクト型学習における学生チームの進捗改善」, 学習分析学, pp. 1-22.
- 岡本瑞生・飯田麟太郎・三阪洋貴・猪尾佳之・池田美里・太田尚孝(2021):「コロナ禍と学生主体の地域貢献活動: 実例×兵庫県立大学しそはちみつコラボプロジェクトを通して」 兵庫地理, 66, pp. 57-66.
- 河原美羽・細見佳乃子・大前亜喜・雫石千代乃・筒井勇翔・土肥真由香・藤原志帆・前田菜緒・太田尚孝(2024):「学生主体のイーグレひめじの活性化にむけたプロジェクト実践: 兵庫県立大学都市計画研究室の2022年度・2023年度の活動報告」 兵庫地理, 69, pp. 157-165.
- 竹田英司(2017):「プロジェクト型学習の実践と効果ー地域産業振興に向けた協同学習ー」, 経済教育,

36(36), pp. 140-148.

豊田寿行・貝増匡俊・脇谷直子(2018) : 「PBL における学習者の相互評価の活用に関する適用分野の影響」, 平成 30 年度一般社団法人日本工学教育協会講演会講演論文集, pp. 518-519.

(きた りおの・ふじはら そうた・ながい ゆきこ・
やまどり みさき・かわはら みう 兵庫県立大学
環境人間学部生、
おおた なおたか 兵庫県立大学環境人間学部)